



Title	函館大学
Citation	高等継続教育研究, 3, 138-147
Issue Date	2004-03-01
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/51897">http://hdl.handle.net/2115/51897</a>
Type	bulletin (other)
File Information	Hakodatedaigaku-3-17.pdf



[Instructions for use](#)

## 5. 函館大学

日 時 2003年12月3日(水) 13:00~15:00  
場 所 函館大学学長室  
話し手 小笠原 愈 氏(函館大学長)  
聞き手 姉崎・光本・染木・高橋・星



小笠原 愈 氏

### 学園のあゆみ

**小笠原** この大学ができたのは1965(昭和40)年の4月1日です。学校法人野又学園の中に10校の学校があるのですが、その中の1大学として位置づいています。学園そのものは、1938(昭和13)年の9月1日に函館計理学校ができて以来の歴史があります。いまの函館大学付属有斗高校の前身です。大学は、函館短期大学の商学科が独立して四年制に昇格し、1965(昭和40)年の開学ですから、38年の歴史があります。

商学部商学科でスタートとして、現在も単学部単学科です。ただ、教職課程を充実していきまして、商業・情報(高等学校1種)・英語(高等学校・中学校1種)の免許を授けています。

### 地域から信頼される大学

**小笠原** 函館は商業都市として推移してきていますので、函館の商業・経済・流通等に対応した研究をいかにして推進するか、また地域のニーズに対応した教育を行うかということに努力してきました。しかし、地方の単科大学ですので、どうしても視野が狭くなりがちですし、また地域との連携も偏ってきますので、全国的・国際的な視点をもたなければならぬということ、1983(昭和58)年4月からハワイの大学との姉妹校提携がスタートしまして、現在は、5カ国(アメリカ(ハワイ)、オーストラリ

ア、中国、大韓民国、イギリス)の八つの大学と姉妹校の提携をしています。交換留学を原則にしていまして、現在、ハワイパシフィック大学から1名の留学生が来ているのに対して、こちらからは3名が留学しています。オーストラリアのニューカッスル大学からは2名の留学生が来ていて、2名を向こうに送り込んでいます。イギリス、パース・スパ大学には2名を送り込んでいますが、今回こちらに来ている留学生はいません。南開大学からは本学に4名が留学しており、こちらからは送っていません。

また、閉鎖性、狭さの克服として、特別講師の制度を設けまして、政・財界のトップクラスの方々を招き、現実社会の最前線を担当しておられますので、原理的な専任教員の講義を補完する意味で、情報なり活きた中身を提供してもらっています。商学部商学科ですから、年金などのことでよく新聞にも登場する磯村元史氏や早稲田大学法学部の島田征夫氏とか、あるいは不動産関係では鎌田孝男氏とか、金融関係では石本一詔氏とか、そういったメンバーです。後に説明しますが、六つのコースがあるものですから、出版・音楽・芸術、あるいは企業家養成の各コースもありますので、例えば、梨本勝氏にも来てもらっています。こうした方々からお話いただき、専任講師と特別講師の調和の中で生きた学問をできるようにしています。

人材養成についてですが、就職率は88.1%です。行き先は、商学部商学科ですから、卸売り、小売業、飲食店、サービス業などが多くなります。比較的規模の大きいところに就職しています。全国にです。函館には大きな企業がありませんので、中小企業の後継者として働く、販売・金融・証券などといったところに、数は少ないですが、入っていきます。

**姉崎** 付属高校からの指定校推薦はあるのですか。

**小笠原** 野又学園は学園訓を共通してもっているんです。幼稚園から高校、短大、大学、専修学校とあります。小中学校はないのですが、付属の高等学校を2校もっていますので、高大連携は当たり前だと思っています。

付属校から入学する率は比較的に高いです。定員200名のうち40～50名程度でしょうか。ビジネスアカデミー、医療保育専門学校、短期大学付設の調理師専修学校など専門学校をもっていますから、こちらへ進学する率も高いです。大学となると予想よりは少なめです。

「創造的に教育事業を進め社会からあつく信頼される大学に高める」というキャッチフレーズをモットーにしているんです。本学は、津軽海峡を真ん中にした南北海道と青森県の東北部を中心の地域にして、そこから同心円的に地域を広げていこうと考えています。学生は九州・沖縄からも来ますが、やはり青森県と函館周辺の南北海道が多いですし、また、そうでなければならぬと思っています。これだけ大学の数が増えて全入時代に近づいていますから、地域社会から愛され、信頼される大学にしていかなないと先は細くなっていきます。

大学というところはもちろん研究が基本ですが、地方の大学が生き延びていくためには、教育、そして地域貢献が重要です。入ってくる学生の質、地域からの期待を考え、教育中心にシフトして、そして地域貢献というところでいろいろな創造的な事業をしていこうと創意工夫をしているところです。

**姉崎** いまの入学してくる学生の地域というのは、伝統的に変わらずにきているのでしょうか。

**小笠原** 1990年前後は関東・関西から多く来ましたが、地元からは入りにくく、入らないという状況があり、地元からそれほど高く評価されない時期がありました。専任教員の意識としても、全国を相手にしている。早稲田大とか慶應義塾大とか、北海学園大とかを視野に入れながらやってきた、という経緯があります。

しかし、この間、地元入学者が激減しまして、どうするかということで発想を変えまして、まず足元を大事にしなければならない、同時に、どういうところにスタンスを置き直すかという二つの課題につきあたりまして、先ほどいいましたところに到達したわけです。

しかし、まだまだ地元は少ないです。200人のうちの6割5分くらいは津軽海峡を真ん中にしたところから入れてこそ、地域から信頼される大学だと思います。

**姉崎** 地元出身者はどれくらいでしょうか。

**小笠原** 777名のうち地元出身者は4割程度です。

**姉崎** 先ほど後継者といわれましたが、地元の企業

の二世の方が入ってくる場合が多いのでしょうか。

**小笠原** 六つのコースの一つに企業家養成コースというのがあります。この4月から、いままでの経営コースを改善して開設したものです。これはまさに、いまいったような二世の経営者を養成するコースです。地元の中小企業の後継者養成です。

北海道らしい企業家を養成するというので、昨日の『北海道新聞』『函館新聞』に載っていますが、このコースの学生たちが企業戦略研究会という研究会を自主的に始めました。この中で、後継者として期待されている学生やすでに代表取締役となっている社会人が入学し、この学生が中心になって地元の期待に沿うような人材養成の活動を行っています。

それから短期大学もあるのですが、ここでは栄養士、調理師、それから訪問介護員とか、エアロビクスダンスインストラクターの資格をとって卒業します。栄養士になる学生は、例えばお父さんが料理店を開いているとか、お菓子をつくる仕事をしているとか、そういうお父さん・お母さんの仕事を見て、興味をもって入ってくるんです。しかし、お父さん・お母さんの後継ぎになるとすれば、もっと専門的な勉強をしたいということで、本学の3年次に編入することもできるんです。短期大学の2年間の勉強をもっと経営的なセンスを身につけることにより生かしていく、こういうコースを拡充しています。

**姉崎** 人数はどのくらいでしょうか。

**小笠原** 希望に応じて柔軟に受け入れていますが、3月までは学長職を兼務していたんですが、やはり大変で、大学の方も生き残っていかなければならないので、いまは別です。

**姉崎** ここは短期大学部ではなく独立ですね。

**小笠原** 函館短大は全国でまれに見るほど定員が充足しているところなんです。その理由はいろいろあるんですが、大学の方もそういう勢いというものを同じにして、初めて同じテーブルにつくことができると思っています。

### 専攻塾とコース

**姉崎** 専攻塾とコースの違いについて教えてください。

**小笠原** 専攻塾というのは、人間教育と商学部商学科としての専門的な教育を4年間継続して積み上げていこうという趣旨なんです。ですから、1年生に入りまして、どこかの専攻塾に所属しますと、3名ないし4名の先生がずっとかかわることができます。



そしてその先生方がもっている人格的なものを吸収して、その先生以上のパーソナリティーをつくりあげる。もう一つは、その先生がもっているそれぞれの専門性を習得して、それ以上の専門家をめざす。江戸時代でいえば「塾」、吉田松陰の松下村塾をモデルにしてやっけて、いま3年目です。あるときはマンツーマンで、あるときは少人数指導で、学修を重ねていくんです。

ただ1年生からですから、いまの学生を見ていると、自分は何を専門にするかということがないままに入ってくる可能性があります。専攻塾に入る前提となる専門的な学習に対する準備ができていないことがあるものですから、ミスマッチが起きることがある。そこをどうするかが課題です。

昨日の教授会で決定したんですが、情報・商業教職専攻塾を発展的に改組して教職教育センターをつくります。ここでは、教職の免許状を授けるとともに、教員をめざす、つまり採用試験に合格するという特別な目的も付与して人材養成をする、そういう特化したセンターになるということです。これまでも、卒業生には教員となっている人が結構いるんです。今後は、高校の商業・情報の教員に加えて、高校や中学校の英語の教員を増やして特色を出すものです。このセンターでは、各専攻塾や各コースに所属しながら、登録して学修を積み重ねることができ

ます。それから、函館は外国に興味をもって勉強したいという人が非常に多いんですよ。国際観光都市です。英語・中国語・ロシア語を視野に入れて、国際ビジネス専攻塾やコミュニケーション専攻塾は充実していきたいと思っています。

それから、コース制の方は六つのコースがありまして、もう少し選択の自由さを持たせています。1年生の段階ではSLという高等学校のロングホーム

ルームのようなクラスに入りながら、六つのコースのどこかに所属して学び、2年生になりましたらゼミナールに所属しながら選択科目を組み合わせでそれぞれのコースに進んでいきます。

コースの中に、企業家養成コースという専攻塾に近いものもできましたけれども、どちらが人気があるかといえば専攻塾です。7割が専攻塾に属して3割がコースです。

**光本** 専攻塾の定員は30名だとありましたが、希望が上回る場合は選抜試験をするのですか。

**小笠原** 選抜試験はありません。事前に面談をしてあきらめる例もありますが、実際には定員以上に入っているところもあるわけです。

**姉崎** 教員が3~4人いると、システムとしてはゼミとは違いますね。

**小笠原** 教員はゼミに慣れてきていますから、教員毎に役割を分担したり、どうしてもゼミ的な傾向になります。全入時代ですから、さまざまな基礎学力をもった学生が入ってきます。最初は基礎学力をつけることが必要なので、チームとしてどうやるかが課題なのですが、チームづくりで苦勞をしています。

**光本** 制度的に専攻塾毎の会議のようなものがあるんですか。

〈参考〉専攻塾・コース制について

専攻塾 (4 塾)

- 国際ビジネス コミュニケーション専攻塾
- 会計専攻塾
- IT 専攻塾
- ビジネス・アスリート専攻塾

コース (6 コース)

- マーケティングコース
- 企業家養成コース
- 金融コース
- 企業法コース
- マスコミと出版ビジネスコース
- 芸能ビジネスコース

センター (1 センター)

- 教職教育センター

**小笠原** 専攻塾連絡会があります。それは各専攻塾の担当教員が集まります。それから、専攻塾ごとのミーティングを行います。そうしないとうまくいきません。

**姉崎** 卒論は専攻塾の場合もコースの場合も書くけれども、指導教員が専攻塾の場合は複数になるということでしょうか。

**小笠原** まだ卒業生は出していませんが、専攻塾の

場合 3~4 人の担当教員になることもあると思います。

**姉崎** この場合のコースは、比較的自由に科目を選択して自分の中でピーク制に、あるいはモジュラー的に単位を集めていくスタイルということでしょうか。

**小笠原** 従来の大学はコース制でしょうね。しかし、専攻塾というのは、社会に貢献していく人材を養成するために、大学のもっている人間的、専門的な高いものを直接担当教員から吸収して、自学自修して、たくましくなるところに目標を置いているわけです。

### 教育中心の大学

**姉崎** 担当する教員の負担は専攻塾の方がより高くなるということでしょうか。

**小笠原** 掲げている目標が高いだけに、学生とのかかわりは本当に大変です。多様な学生が入ってきますから。なぜ教育機能にシフトを敷くかということ、4 年間で就職までもっていかなければならないわけですから。面接で一言も話せないで帰ってきた学生もいます。そうかと思えば、国家試験に合格する学生もいます。実に多種多様ですが、基礎学力がなく、学習の意欲をもてないで入学する学生がだんだん多くなっています。どうしても教育機能にシフトして、私たちが教育内容や指導方法の勉強をしないと学生を引きつける交流ができないですね。

このようなこともあり、私はいつも 8 時 45 分から 9 時 10 分くらいまで玄関に立って学生を迎えているんです。そして 1 人 1 人に声をかけます。手ぶらで来る学生がいるものですから、教科書どうしたんだ、といったら、ロッカーに入っています、ノートどうするといったら、友達に借ります、ペンどうするといったら、あっとかいてね (笑)。また、そうすることで、学生から授業に関する情報を得ることもあります。教育に対する責任というものがあるわけですから、教員の授業に関する意識も改善しないとダメです。言葉でいうのは易しいですが、教育機能中心の大学にするのは難しいです。

**姉崎** 大学の初年次教育の必要性が強調されはじめていますが、函館大学では初年次に何か特別な科目などを設定されているのでしょうか。

**小笠原** ベーシック科目の知識は浅いと痛感しています。全学的には、「商学入門」という科目の中に、いまいわれたような要素をくみこんでやっています。社会人あるいは学生としての態度形成に関わる学習

方法基礎論といったものも設定しています。社会人・学生としての態度形成が固まるような内容です。

それから、専攻塾では、語学・数学・情報等の基礎的なものを、各専攻塾によって若干違いますけれども、1 年生について学修するよう工夫しています。

**姉崎** FD は始められているんですか。

**小笠原** FD についても系統的にやらなければならないと感じてはいますが、まだ不十分です。

本当に大変です。英語の辞典が引けない学生、挨拶もできない学生もいるくらいですから。過去の教育がどうかということはあるでしょうけれども、大学がもつ役割は本当に多種多様になってきました。

**姉崎** 教員が従来のスタイルのままやっていると大量に不合格・留年者が出る場合がありますけれど、そういう場合はどういうふうにしていますか。

**小笠原** チェックをきめ細かにしています。出席状況の把握をしていますから、出席がおもわしくない学生には電話をして朝に起こすなどをしています。でも、出ないんですよ、ずるくて (笑)。3 カ月毎くらいでチェックして、学生に個別に電話をかけたり、面談したりということをして、中途退学者を減らす目的で実施してきました。実際に少なくなりましたよ。

学生の人数が多いから学校に来ているのかどうか分からない、などということはありません。777 名のカルテが全部ありますから。各学生についてそのつど情報が入るようになっています。履修状況、クラブ、試験の結果状況などが全て個人カルテにインプットされていますから。

**姉崎** 立命館が電子カルテというのをやっていますが、それと同じようなものですか。

**小笠原** そこまではまだいいません。

父母会をタイムリーに開いています。学生のいい面・悪い面について、それにそって話をします。小学校・中学校でやっていることを再現しているということでしょうか。そういうかたちで、入学から卒業まで責任をもとると、つまり、本学は学費で経営していますから、学費分のサービスをしようということです。だから先生方は大変です。専任の教員は疲れ気味です。

**姉崎** 職員の方も役割を担うことになりそうですね。

**小笠原** 職員も教育者であって、学生は顧客ですから、そういう研修もしています。

むしろいまは職員の方に勢いが出てきているんじゃないでしょうか。この間の大学祭には全職員が出ました。一方、教員で出なかったのは 4 人かな。い

っしょに準備したり、いろいろなことをやっていますね。

**姉崎** 大学もいろいろなことをしなければならなくなっていますね。北大でも来年からクラスアワーというのが始まります。

**小笠原** いわゆる偏差値が高くない学生の中に、国際コミュニケーション専攻塾でオーストラリアに短期の語学研修で英語力を身につけてくる学生もいます。経済的な事情により札幌・東京へ進学できない優秀な学生も入ってきます。そういう者は勢いが違います。だから差がすごいです。

大学の使命には研究と教育と地域貢献がありますから、三つともやらなければいけないわけですが、むしろいまは後者二つが問われています。

**姉崎** 学習面もそうですが、近年は精神面で困難を抱えている学生が増えています。そういう学生は来なかったり、見えなかったりするので大変ですね。

**小笠原** 小さい大学ですから目が比較的届きます。そういう兆候をチェックするために、学生部に「なんでも相談係」というのをつくりました。早期発見で対応するよう努めています。中学校等で実績を挙げた職員にメンタルヘルスアドバイザーのような役割を願っています。第一線は専攻塾の教員、SL やゼミの教員が担っています。早期に兆候を見つけないと、どうしても中途退学につながってしまいます。

いま困っているのは、経済的に学費を出せないという問題です。延滞・延納が多いです。こういう中小都市ですから、アルバイト先も少ないのです。経済的な困窮をフォローするために奨学金制度を独自につくっています。特待生制度、1万円アパートもあります。1万円アパートというのは、民間アパートを借り上げたもので、家賃1万円と管理費が2000円です。この近辺に5棟もっています。ベット・机・冷蔵庫・炊飯器・洗濯機も備えています。学費は下げられませんので、そういうふうにして対応しています。また、地元から通学する学生のために五稜郭から無料バスを出しています。これは短大でも一緒です。片道250円、往復500円かかりますから、これも学生にとっては大変な出費です。函館大学の名前を書いたバスが走っていますよ。

日本育英会の奨学金はいま、777名中178名が対象になっています。多いです。

**姉崎** 階層的にはどのあたりの学生が多いですか。

**小笠原** 教員の子は数名いますが、弁護士など社会的活躍の場が多い保護者は少ないです。

**姉崎** そういう方々にとってはこういうサービスはありがたいことですね。

**小笠原** 感謝されていますね。営利法人ではありませんから、学費をいただいて運営しているわけですから。私の仕事は国からの助成金をいかに多くするかということです。国からはいまいろんな助成ができてきましたから、そういう助成の対象になるような評価を受ける事業をやるかが重要になっています。**光本** 市からも助成があるんですか。留学生の奨学金というのがあるようですが。

**小笠原** 北海道から3万円、市から1万円です。

### 高大連携

**小笠原** 付属校はあたりまえとして、いま、函館商業高校と協定を結んでいます。それから函館西高校ともやっています。商業についてはオールラウンドに連携しています。西高校とは英語についての連携です。北大と札幌北高との連携をモデルにしています。

地域の高等学校と高等教育機関が連携して、人材養成についてある程度見通しのある一貫した教育課程をつくるのが大切でしょう。大学は高等学校の実状をわきまえて教育課程を組み立てていかなければなりませんし、高等学校は逆に、大学のもっている教育資源を活用することによって質の高い教育活動ができるということで、両方にとってメリットがあります。

**姉崎** 高校生が大学に来て授業を受ける。

**小笠原** そういうこともあります。

**姉崎** 逆に大学の教員が高校に出向いて授業をやることもありますか。

**小笠原** あります。出前授業はけっこう多くなっています。

函館大学は英検とか TOEIC の会場になっているんです。英語のスタッフが充実しているものですから。その受験講座みたいなものを開いてほしいということで、関係する高校に出向くなどしています。また、スポーツでは、バドミントンやテニスなどを本学で一緒に練習しています。

それから、地域のクリスマスファンタジー等のイベントがどういう意味を持つかという調査研究をうちが担っているんです。学生が30名くらい参加します。そのときに商業高校の生徒も一緒になって調査研究をする出会いも予定しています。

## 産学連携・地域連携

**小笠原** 地域の産学連携の中で本学がどういう役割を果たすかということです。函館地区は未来大にしても北大水産学部にしても高専にしても、どちらかというものをつくる方なんです。つくる過程での連携がしやすいんです。しかし、うちはつくっていませんから、市場調査だとか、流通、マーケティングといったことで貢献することに役割があると考えています。

最近の産学連携は大きな難題に当面しているように思います。最も大事な血液をどう流すかが研究されていないわけです。売れる品物をつくっているわけでもなければ、ニーズにあっているわけでもありません。商学部がもっている専門性でなければできないことに気がついてきていると思っています。本学が意識しているのはそこなんです。

函館市がいろいろなイベントを行うわけですが、その企画や評価にいかにか参画していくかです。その一つの例として、塩ラーメンサミットというのがあるんですが、そのアンケート調査は高く評価されました。観光都市としての函館にとってどんな意味合いがあるかとか、今後継続していくとすればどのような課題があるかなど、観光資源としての評価や社会的波及効果の分析など地域の街づくりのマーケティング戦略を追究するのが本学です。

**光本** 大学間連携や市政との協力はどのような状況でしょうか。

**小笠原** 市の企画部が音頭をとりながら、八つの高等教育機関が連携して、「函館アカデミックフォーラム」を開催しています。めざすのは国際海洋都市や観光都市の構想ですが、そこに達するためのアプローチの仕方はいろいろある、それぞれが特色を出してそれを統合化していくシステムが必要です。私もそういうことを考えていますが、それはいずれかたちになるでしょう。

あとは地域の企業家との連携です。企業家の研修、企業家に対する相談援助、企業家との共同研究などをやらなければいけないことだと思います。そこでは、企業家養成コース、マーケティングコース、国際ビジネス・コミュニケーション専攻塾等が活躍をしなければいけないと思っています。

## 地域活性化事業と学生の活動

**姉崎** 大門まつりに見られるような街の再開発、活性化への動きに対して、函館大学はアドバンテージ

があるようにも思います。

**小笠原** これまでの動きを見ると地域のそういう動きに参画してこなかったように思います。“ふるさと意識”がどうしても欠けていた。職員も学生も函館出身者が少ないですから、地域というものが心理的に遠かったんです。しかし、教育あるいは研究をしているうちに、地元視点をおいて考えることがどれだけ大切か分かってきたように思います。

大門まつりにはスタッフに本学からも参加しています。さらに塩ラーメンサミットとクリスマスファンタジーには積極的に参画しています。

**光本** 市は未来大の設置者ですから、宣伝するわけですね。

**小笠原** だから、大門まつりと同じ地元の学生がやっているのに、この違いは何だろうと、私は疑問を感じているのです。

施設設備にしても、教員数にしても、国公立はうらやましいです。でも、もう少し経つと、本物の人材養成は私学という時代になっていくと思っています。手づくりが多いですから。

## 教員の地域への定着と貢献

**姉崎** 未来大の教員は単身赴任者が多いと聞いていますが、函館大はどうでしょうか。

**小笠原** 少なくなってきました。やっぱり地域から離れると“ふるさと意識”が欠けますから、大学を活性化するときには本気になれないように思います。本学は一生懸命やった人が他大学からスカウトされる率が少ないです。ご存じのように地方の大学ではそういう問題があります。研究や教育の面で実績を挙げれば、札幌や東京の私学にスカウトされる、また、それをめざして努力するという向きがあるわけです。本学では、ゼロではありませんが、少ないです。

**姉崎** 地域貢献をするためには、リサーチにある程度特化しないと難しいこともありますね。釧路公立大学や名寄短期大学はそれぞれ地域研究所をもっています。

**小笠原** 本学も研究所をもっています。北海道産業開発研究所と函館大学経営研究所です。

ただ、出前講座もそうですが、要請される教員が偏ってくるという問題があるんです。講演の依頼なども偏ります。これはバランスが難しいです。出れば出るほど休講が多くなるなんてことは避けたいといけませんから、高校訪問にしても企業訪問にして

も、授業の入っているところではやらないことにしています。春休み・夏休みなどにやるわけです。しかし、その時期に学会が入っていたりすると、これは悩みますね。3年くらい研究をストップしてよといえればいいんですけども、そうはいえませんが。

**光本** 北海道産業開発研究所はかなり古くからありますが、しばらく停滞していて近年復活したと自己点検・評価報告書に書いてありますが、近年特に力を入れている背景などを教えていただけますか。

**小笠原** 文献を書いたり、紀要に書いたりすることが大切な役割だと認識される中で、地域に視点をおいて生きた研究をするという点でやり易くなったんだと思います。調査などちょっとしたヒントがあればできますから。それから、研究そのものの体制も、所長も代わり、教育研究の大切さが理解されてきたんじゃないかと思います。また、資格審査も厳しくなり、そういう実績を重ねないと昇任できませんから。

『商学論究』と『論究』という研究誌があるんですが、そこに発表しないと発言権がないような雰囲気があります。昇任のときにも、研究誌にいくら書いたかが実績になります。

**姉崎** 受託研究を共同でやられるようなことは。

**小笠原** その必要性は痛感してチームをつくっているのですが、まだまだですね。

#### 公開講座

**小笠原** 今年の公開講座等は、先ほどいいました特別講師の方々に出していただきまして、一般市民を対象にした講座を4回やりました。大変好評でした。

**姉崎** これは無料なんですか。

**小笠原** そうです。定員の制限がありますが毎回100名ほど参加がありました。今度は専任教員と組み合わせて実施しようと考えています。

**姉崎** 特別講義のときに合わせて行うのでしょうか。

**小笠原** そうです。

#### 図書館の開放

**小笠原** 図書館を利用する人も増えています。図書を整理して市民に開放していますし、市立図書館とのネットワークをはかって、端末において図書の検索もできるようになっています。

**光本** 道からの補助も地域開放している図書館に対してのものですね。

**小笠原** そういう理屈です。

#### 教育委員会・市との連携

**姉崎** 地元の教育委員会との連携についてはいかがでしょうか。

**小笠原** 市民向けの講座については、生涯学習課と相談して、生涯学習課の広報誌に出してもらっているんです。市の教育委員会とのつながりは深いです。

それから、生涯学習課で主催するリーダー養成とか、いろいろな研修会があるのですが、それには私も含めて、ずいぶん要請があります。この公開講座のときには、生涯学習課の課長だとか職員が見えています。

**光本** 2000年の自己点検・評価報告書には、公開講座について課題だと書かれていますが、その後の経過はいかがでしょう。

**小笠原** 市とのつながりができてきました。向こうで企画するときに知恵を借りに来ます。これが一番大事だと思います。匿名の仕事です。そういう仕事にもっと情熱をもつことです。そういう相談はずいぶん来ます。

それから、委員会がいくつもあります。そこに本学の先生が加わることも多くなってきました。例えば、函館市青少年問題研究協議会というのがありますが、その会長は市長で、副会長が私です。生涯学習推進委員事業検討委員会の座長も本学の教員です。そういう委員としての参加を大事にしています。講演会にも本学の心理学担当の教員はずいぶん出ています。

**光本** そういう委嘱が増えてきたのは最近のことですか。

**小笠原** そうですね。市の教育委員会とのつながりが強くなり、要請も増えてきました。

**姉崎** 従来は教育大が多かった。

**小笠原** そうです。学長が教育とのつながりが深いのも要因かもしれませんね。

大学が地域のシンクタンクの役割を果たさなければならない、それがだんだん分かってきたのです。教育委員会ですから、全部教育に関係しているわけですが、こちらに要請が来ているようです。臨床心理学の専任講師などは要請はすごいですよ。虐待・非行問題、カウンセラーの養成など、いろいろなところから声がかかります。

不思議なことに、市民との接触が増えると教授会の発言が変わってくるんです。視野が広がるので



しょうね。どうしても専門性に閉じこもりがちなんです。これからの大学人は視野の広がりをもたないと人をひきつけられないと思います。

そういう意味では、研究・教育と地域貢献は三位一体ということで、地域から大学に対する期待が出てくるのだと思います。いかにして三つを調和するか、大学改革というのはそういうことです。教育・地域貢献ということをいうけれども、どれだけ真剣に考えてきたのか。極論でしょうが、研究、研究といって何万本もレポートが出るけれども、世の中が予想したよりもよくなる。そういうジレンマに日本は陥っていたのではないのでしょうか。

**姉崎** 最近インターンシップが増えてきて、学生が出て行くことによって地域と大学との関係が深まることもあります。

**小笠原** 問題意識にはありますけれども、まだ手をつけていません。ただ、IT 専攻塾、会計専攻塾の中で 3、4 年に実習を兼ねて企業へ行こうと計画しています。

IT 塾の話で思い出したんですが、高齢者の社会福祉施設を定期的に訪問して、高齢者へパソコンを教えています。高齢者というのは身体機能が低下しているわけですが、その人たちが使い易いパソコンとはどうあるべきかというニーズに応えられる実習先がないかと思っています。いまこの地域は高齢化社会から高齢社会になってきていまして、高齢者を対象にした福祉施設が非常に多いんです。ということは、福祉会計に強い人材が求められるわけです。うちは会計簿記をやっていますから、福祉会計にどうアプローチするかということで、会計簿記の学生は福祉施設を実習先を選んで新しい道を拓こうと考えているんです。

**姉崎** 社会福祉法人に行つて、実習して…。

**小笠原** 大学に戻ってきて勉強して、就職する、というようなことをインターンシップの方向として、まだ願望ですけれども、道をつけようと思っています。新しい実践が開けるようなものでないといけませんね。そういうかたちで、地域での就職率も高くしていきたいと思っています。

#### 高等教育機関のすみわけ・連携

**姉崎** それぞれが我が道をいくという函館人気質のようなものがあるようにもうかがっていますが、いっしょにやりながらすみわけをやることは可能でしょうか。



**小笠原** ご指摘の通りで、そこに気がついてきたのではないのでしょうか。それぞれはそれぞれで充実しているようですが、横断的に目標値を設定して達成するという経験がないんです。商売はみんなそうなんです。だから、函館へ来て商業・経済で成功している人は皆よそから来た人なんですね。街づくりにしても、企業にしても、総合的な知恵、データバンク、シンクタンクというものを用意して、それぞれが役割分担して協業して、というムードは歴史的になかなかつくりにくいです。

しかしそういう気運はできてきました。中心になっているのは北大水産学部です。そういうところを問題意識としてもっている先生方が増えてきました。そういう中に函館で育った人が少ないんですよ。総合的な見方をする人は残念ながら外から来た人なんです。この土地の閉鎖性というか、やっぱり北海道の南の端ということで、一番先に開けたという意識が強いんですよ。いまでも札幌でも旭川でも「奥地」ですから。土地土地であるんでしょうけれども、それがここはやや強いんです。私も 23 年ぶりにここに戻って仕事をしているんですけども、いまでも「よそ者」なんです（笑）。

#### 父母懇談会

**高橋** 父母懇談会を頻繁に開くのは父母側からの要請なのでしょうか。

**小笠原** 「協学会」という PTA のような組織があるんです。その総会が年 2 回あり、さらに地区懇談会を定期的に行っています。「地域協学会」といって、函館・仙台・青森・東京等にありますが、高等教育訪問・企業訪問などで先生方がチームをつくって行くのですが、夜の時間が空くのでそのときに就職懇談会を実施しています。高等学校訪問でも、例えば帯広に行ったときに、帯広からはどの学年に誰が来て

いるか分かるわけです。そのときのお土産は大学でどんな出席状況か、単位の履修状況がどうか、スポーツとか文化活動ではどうかということが話題になります。なかなか親にそういうことを話しませんから、知らなかったというのが多いです。そういうときにさっきのデータをもっていくわけです。なかなか塾の担任とか、SLの担任とかが都合よく行くわけではありませんから、私などは授業をもっていませんから、突発的に行くときがありますが、そういうことは非常に喜ばれますね。

同時に親の期待も聞いてくるんです。高校でこうだったけれど、こうしてほしいとか、こういうところに就職してほしいとか、経済的な事情でアルバイトをしなければならぬ状況だけれど、4年間でなしに6年間で卒業してもいいですか、とか。最近はそのような声が多いです。5年生になって12単位以内の場合には、1単位15000円だったんですが、20でも25でも15000円にすることにしました。それも親のニーズなんです。そういう親とか地域のニーズを受け止めないとよい教育はできないんです。

職員も一緒に行きます。そうしなければ職員も親との呼吸が合わないものですからね。父母の前に出たら先生だよ、とっています。小さな大学の利点を生かすようにしています。東京などではけっこう集まります。インフォーマルなかたちで懇談会をもち、旅費を有効に使うようにしています。夕食を食べながら4人とか6人の集まりを頻りにやっています。

**姉崎** 同窓会組織は強いのでしょうか。

**小笠原** 38年経ちますけれど、数が少ないものだから。一番上で57歳くらいの年齢ですが、企業の第一線で社長などになっている例はそんなにはないんです。そういう意味では働くことに夢中だという者が多いものですから、同窓会を手弁当でする人は少ないんです。ただ、支部は札幌・東北・東京と三つあります。役員組織もあり、定期的に関っています。

### 学生の人格形成

**星** 学園訓を読ませてもらっても学生の人格形成を重視しているのが分かるんですけども、教員も学生以上に人格を磨くとおっしゃっていましたが、教員の方も学園訓を意識していらっしゃるのですか。

**小笠原** 4月の入学式では学園訓を易しく話すことが学長の仕事です。講話は印刷物として父母・教員にも全員に配布されます。若い教員には難しいこと

もありますね。どうすれば学生の態度形成をできるのか、そういう意味で共通のものを持つことが大切です。

そういうことで、学園訓の具体化には気をつけています。例えば、挨拶なんかでも徹底して指導するんです。男子学生が多いものですから粗野な感じがしますけれども、挨拶はよくしますね。

**星** 学年を経るごとに指導する必要性は減っていきますか。

**小笠原** 評価は就職のときではないでしょうか。いまの企業はご承知の通り、どれだけものができるかよりも、しようとするか、意欲とか連帯性とか社会性だとか、基本的な生活習慣などを行動化できるかといったところで評価しています。採用されなかったときはどこかが足りなかったと考えるようにしています。最近では面接で落とされるんです。専攻塾を始めてまだ3年目ですから、4年目になったら楽しみです。

教育の専門性については、教育哲学とか教育方法について勉強しなければなりません。それはいずれFDの中に盛り込むつもりです。教職担当の先生もいるのですから、そういうものを他の先生方も学ぶ必要があります。簿記をやる人もマーケットについてやる人も教育方法の基礎が身につけていることが必要です。大学院でもそういう勉強をしないですからね。ノートの取れない学生をどうするか、意欲のない学生にどうやって動機づけするか、などが課題です。

### 教職教育センター

**星** 教職教育センターは採用されることを目標にしているといわれましたが、何か特別にしようとしていることはありますか。

**小笠原** 教科に関することについては専攻塾でやりますが、教職に関する科目と教職及び教科に関する科目は教職課程でやることになります。さらに、教職特別講座というのを今度用意します。これは単位認定をしません。まず六つの講座を組もうと思っています。例えば、「教職教養Ⅰ・Ⅱ」とか、公立学校の教員採用試験に出ているものを見ながら、どういう勉強をしたら効果があるかというものです。これは教職課程の中身をもっときめ細かにやるということなんですけれど、そういう特別講座を用意して、これを勉強するとほかの公務員試験なんかを受ける場合にも受講できるように配慮してやるつもりです。

だから、教職につく学生が出てこないとなら成果があったとはいえないわけです。担当する先生についても、高等学校とか教育委員会などでそういうことに携わったことのある経験者を大事にしようと思っています。

**星** 教職希望の学生は多いんですか。

**小笠原** 多くなってきました。特に英語は多いです。

**姉崎** 受講料は。

**小笠原** 無料です。部屋も専用の部屋を使ってセンター長を用意します。担当する先生方は教職担当教員と非常勤講師の組み合わせです。一般的に教職課程センターはあるんでしょうけれども、教職教育センターはないと思います。

**姉崎** いまは教職担当の先生は商学科の中にいるわけですけど、これができると独立したかたちになるのでしょうか。

**小笠原** 研究所・図書館と並列した組織におきます。こういう特色を出さないと生き残っていけないんですよ。北海道だけでなく、青森とか秋田の地域の人材も育てていきたいです。そういう特化したものについてどう思いますか。

**星** 教員志望の学生は、けっこう小さい頃からなりたいたいと思っている学生もいるので、そういう人にとっては特化したものがあるのはよいことだと思います。

**小笠原** 教員になりたいと思っても教育大に入れない人もいますから、英語の勉強をしたくても経済的な事情により地元には進学できない人もいます。そういうときに地元により高等教育機関がないときびしいです。

昨年の3月に、渡島・檜山管内の進学したいという高校卒業生に、市役所の高等教育機関整備促進会が調査したんです。そうしたら、函館市内の大学・短大・専修学校にというのは21.4%でした。約8割の学生が札幌や東京に進学を希望するわけです。なぜ行くのかというと、地元で自分の希望する大学・短大がないということなんです。地域貢献というのは、そういう地域のニーズに応える高等教育機関になることも一つなんです。英語も、国際観光都市でそういうものを使って仕事をする人材が多いだけに、学生を多くしたいです。

## 学生の活動の支援

**染木** 学生がインフォーマルなところに出て活動することを推奨する具体的なシステムがあるのでしょ

うか。

**小笠原** システムまではできていませんが、たとえばクリスマスファンタジーに40名くらいの学生が参加して調査インタビューをします。それで、大学の方で交通費ぐらいは出すという配慮はしています。ボランティアと同じではなく長続きをさせるためには足代を出すくらいはいい。そうすることで、成果を報告させるなどの“見返り”を求めることができるんです。問題をどう整理して、研究にどうプラスになったのかを聞くことができます。支出があることははじめからいっていませんから、ああ、こんなことまで大学が考えてくれているんだと、喜んでくれたらいいんじゃないでしょうか。

**染木** 成績などのデータの中に課外活動などの情報も入れるのでしょうか。

**小笠原** プラスになる副次的なものが多いので入れています。見ず知らずの人に会う、頼み方がありませんよね。インタビューしている最中に、相手の目線に立って自分の姿勢を変えることが必要でしょうし、一つひとつ、相手の年齢等を考えながら質問するので、すごく疲れるというんです。下手な人は相手をとどめておいて長い時間やるんです。そういう社会性がすごく身につく機会なんです。これらを簡潔に表現します。

それから、自分たちが汗を流して集めたデータを整理する段階になったら、驚くことがあります。例えば、学生が、先生、函館で五稜郭の次にぎわっているのは大門だと思っていたら違いました、美原地区だった、というんです。大門は4番目だというんです。3番目は上磯七重浜の方だというんです。だから大門を活性化するといっても一過性のものだというんです。これには驚きました。このことの一部をアカデミックなフォーラムで発表しましたら、ある企業からの賞をいただきました。学生は本当に喜びましたよ。このような副次的な効果を狙っています。

生き延びていける大学にならなければいけないということでやっていますので、逆に教えていただくこともあるかと思います。

**姉崎** 今日はどうもありがとうございました。